



一新校区には歴史を感じさせる建物が多い。中でも170年続く菓屋のある通りは、校区を代表する風景

校区のシンボル・藤崎台のクスノキ群。樹齢千年を超え、一新校区で保護活動を行っている



誰もがいきいきと暮らすための「地域力」を磨く

熊本城の歴史とともに歩む町

城の 西側に位置し、熊本も校区内という一新校区。「弥生時代の遺跡もあるのですが、人が集まり始めたのは平安時代。その頃は、藤崎台県営野球場の場所に藤崎八幡宮がありましたから、門前町ですね。こう語るのには、城下町の案内人も務め

る一新校区自治協議会の毛利秀士会長です。加藤清正が熊本城を築城したのち、この一帯には武家屋敷が建ち、商人や職人が住む城下町となっていきました。西南戦争での熊本城の戦いでもとても激しい戦いが繰り広げられた段山も校区内です。「町は焼けてしまいましたが、有力な商人たちが多い町だったから、復興も早かったんです」と毛利さん。一新校区では、そんな歴史の中で培われた地域の力強さが支えるさまざまな取り組みが行われています。

絆を強めた地蔵まつりの復活

「以前からPTAなどもよく機能していた校区なんです」と話すのは、NPO法人一新まちづくりの会の北村直登理事長です。校区にはPTAのOBグループ『一新校応援団』があり、保護者の帰宅時間まで学校で子どもたちにスポーツを教えたり、緑のカーテ

ンづくりに取り組んだり、10

以上の活動をしています。平成元年の一新まちづくりの会設立も、「昭和63年に一新小学校PTAが校区を考えるシンポジウムを開催した時に、せっかく集まって話し合いを持ったのだからこれを継続させようとしたことがきっかけでした」。

会がまず取り組んだのが、地蔵まつりの復活。「子どもの頃は賑やかなお祭りだったのですが、えている人が多かったのですが、いつしか廃れてしまっていたんです。地域の連帯を強め、古い歴史を掘り起こし地域を活性化すること。この2つを大きな目的に復活を考えました」。現在では、住民はもちろん、校区内の高校の生徒なども参加する盛大なお祭りとなっています。

スーパード人気『きぼうの家』の手焼きせんべい

会では、特に障がい者支援に力を入れています。市単位

支援協議会があります。市単位

授産施設『新町きぼうの家』での手焼きせんべい製造。最初は3人で始めたが、今では20人が作業を行う